

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月20日現在

機関番号：35406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2011

課題番号：22720206

研究課題名（和文） 第二言語習得過程における文法項目と動詞の関係-受身文と動詞の関係を中心に-

研究課題名（英文） A Study on the Relationship between Verbs and the Passive in the Second Language Acquisition of Japanese.

研究代表者

川崎 千枝見 (KAWASAKI CHIEMI)

広島国際学院大学・工学部・講師

研究者番号：70432705

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、単一の文法項目である受身文において、習得過程が動詞によって異なるかを量的に検証することであった。本研究に先立つ6名の日本語学習者の縦断的発話コーパスの分析から、受身文で使用される動詞は、主に受身形で使用される動詞（「語彙受身」）と複数の文法項目で広く使用される動詞（「文法受身」）に大別された。量的調査を行った結果、理解調査の「文法受身」では誤りを正しく誤りと判断できない語が多く、理解における問題点が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine quantitatively whether the type of verb has an effect on the acquisition of Japanese passive. A previous analysis of a longitudinal corpus of 6 learners showed that verbs used in the Passive can be divided into two groups: the first group are verbs used mainly in the Passive form; the second group are verbs in a variety of forms.

The results of the experiment showed that learners had difficulty in understanding the use of Passive with the second group of verbs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：コーパス分析・動詞語彙・受身文・第二言語習得

1. 研究開始当初の背景

言語習得過程において、ある文法はどのように学習者の中間言語の中に取り込まれ、習得されていくのであろうか。

第一言語習得過程の初期段階において、丸

暗記の固まりのまま記憶されたものが、次第に文法構造として発達していくという「動詞の島仮説」(Tomasello 1992)がある。

現在、この仮説、および、ここから発展した「使用依拠モデル」(Tomasello 2003)が日

本語の第二言語習得においても同様の現象が見られるか、主にデータ分析に基づく検討がなされている。これらの研究によって、言語知識がどのように獲得され、組織化されていくかが明らかになることが期待されている。この立場からの研究は、日本語学習者がどのような言語形式をどのような順に使用し始めるかを分析するものである。したがって、従来の「特定の文法項目を対象とした研究」と個別の文法形式を対象としない『『固まり』研究』の両者を統合した研究が行えるものであると考える。前者は特定の文法項目の発達過程を明らかにするが、他の項目や動詞との関連がみえにくいという点があり、また、後者も、人間の認知的スキルについての知見が得られるものの、特定の習得段階を対象とするため、習得過程の俯瞰的理解は難しいという点がある。

本研究は個別の言語形式の発達を、そこで使用される動詞を中心として細な検討を行う。本研究では、初級段階で学習されるものの、使用に至るのは中級からと、習得が容易でないといわれている「受身」を扱う。

これまでに、日本語学習者の縦断的発話データに現れる受身文および受身文で使用される動詞の全出現形式の分析を行った。その結果、受身という単一の文法項目内においても動詞によって、使用される活用形の種類や数が異なり、受身で使用される動詞は2つのタイプに大別できることが示唆された。

しかしながら、この種のコーパスでは、コーパス内に現れない語や表現について、「使えない」とは判断できないという限界があった。

2. 研究の目的

そこで、本研究は自由発話コーパスで観察された受身文における2タイプの動詞について量的調査を実施し、その一般化可能性を探ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 受身文における動詞の2タイプ

日本語学習者6名の3年間(3-4か月ごとのデータ、一人当たり会話時間数計は7時間)にわたる縦断的発話コーパスで、受身文の使用状況、および受身文で使用された動詞の全出現形を抽出した。その結果、受身形で使用された動詞には、(ア)さまざまな活用形や文法項目で使用されたのちに受身文で使用される動詞、と(イ)受身文ではじめて使用される動詞(かつ、他の文法項目で使用されることがごくわずかである動詞)の2つのタイプに大別できることが分かった。

日本語学習者にとって、受身文は学習しても使用に至るまでに時間がかかることが指

摘されている。つまり、受身文は他の文法項目に出現が後れるということであるから、受身文で使用される動詞は上記(ア)のタイプがほとんどであると予想される。しかしながら、実際には、(イ)のタイプの動詞が存在しており、これは動詞ごとに発達の過程が異なるというTomaseillo(1992)の指摘と重なるものである。

(ア)のタイプを動詞の活用規則によって受身形を作っている可能性のある動詞として「文法受身」、(イ)のタイプを受身の形でそのまま覚え、使用している可能性がある動詞として「語彙受身」と呼ぶことにする。分析結果から、文法受身として「言う、聞く、怒る、見る、いじめる、取る」が、語彙受身として「叱る、騙す、認める、嫌う、誘う」が観察された。

しかしながら、この結果は自由発話コーパス分析によるものであり、データ上の限界がある。このデータからは、学習者が「使用できる」ことは観察できるものの、「使用できない」「理解できない」ことは示すことができない。そこで、次の段階として、ここでの結果が一般化できるものであるかを確認するための量的調査を行った。

(2) 調査

① 被調査者及び調査時期

調査は中国の大学で学ぶ日本語学習者で、対象項目である受身文の学習を終えている2年生(50名)及び3年生(51名)の計101名を対象に2011年3月に行った。全員が中国語母語話者であった。

日本語能力の測定にはSPOT(Simple Performance-Oriented Test)を用いた。学年間で日本語能力(SPOT)得点に差があるかについてt検定を行ったところ、有意差が見られた($t(99)=5.36, p<.01$)。この結果と平均値(3年生53.6点、2年生45.4点)から3年生の方が日本語力が高いといえる。

② 調査材料及び方法

上述の語彙受身(5語)と文法受身(6語)およびフィラー(16語)を用いた。各語の内容を表すイラストを1枚に1つ表示し、綴じたものを作製した。

被調査者はヘッドフォンを通して聞こえる音声(例:おじいさんは女の子に怒られている)の内容がイラストで表されている内容と合致すれば○を、合致しない場合は×を、イラストの下の解答欄に記入するよう指示した。

調査で使用した問題は、語ごとにイラストと同じ内容を聴覚提示するもの(正判定問題:「○」が正解)と、異なる内容を示すもの(誤判定問題:「×」が正解)を配した。よって語彙受身が5語×2=10問、文法受身

6語×2=12問、これにフィラー24問を加え、全46問であった。音声で提示される動詞の形は、語彙受身5語中3語は正判定問題、誤判定問題ともに受身形で用い、残りの2語は非受身形(能動態)で用いた。同様に、文法受身6語中3語を受身形で残りの3語は非受身形で用いた。

問題の提示順については、同じ動詞が連続しないこと、受身が連続しないことを条件にランダムに動詞を配列した。カウンターバランスを取るため、問題の順序を入れ替えた2種類の問題を作成し、各学年を2つに分け、半数ずつ使用した。

4. 研究成果

(1) 各動詞の正答率

各動詞の正答率を表1に示した。学年別にみると、おおむね3年生の方が2年生より高くなるが、文法受身ではその差が小さいことが分かる。動詞のタイプによる違いはここからは窺いにくい。

表1 各動詞の正答率

動詞正答率	語彙受身				
	叱る	騙す	認める	嫌う	誘う
2年	49.5	53.1	63.0	35.9	59.6
3年	62.2	64.4	54.5	41.8	66.7
全	55.9	59.1	58.5	38.9	63.2

動詞正答率	文法受身					
	言う	聞く	怒る	見る	いじめる	取る
2年	45.3	57.9	54.3	38.8	67.9	37.0
3年	43.4	58.4	53.0	39.8	70.7	31.5
全	44.3	58.2	53.6	39.3	69.4	34.2

(単位%)

(2) 「語彙受身」と「文法受身」

次に、語彙受身と文法受身の間の相違について検討する。

表2は各動詞の正判定問題と誤判定問題それぞれの正答率を学年別に表したものである。

表2 各動詞の問題別正答率

種別	語彙受身									
	叱る		騙す		認める		嫌う		誘う	
受身/非受身	受身	非受身								
正解	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×
2年生	62.5	36.7	62.5	43.9	76.6	48.9	37.2	34.7	60.9	58.3
3年生	72.9	52.0	82.2	46.7	50.0	58.8	47.9	36.0	53.3	78.4
全体	64.4	43.6	61.4	38.6	60.4	51.5	38.6	34.7	51.5	67.3

種別	文法受身											
	言う		聞く		怒る		見る		いじめる		取る	
受身/非受身	受身	非受身										
正解	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×	○	×
2年生	72.3	18.8	87.8	26.1	73.9	34.8	67.3	10.2	79.5	67.1	53.3	21.3
3年生	83.3	5.9	86.0	31.4	85.7	21.6	75.5	4.1	73.8	68.0	41.7	20.5
全体	73.3	11.9	85.1	27.7	75.2	26.7	69.3	6.9	61.4	57.4	43.6	18.8

(単位%)

これを見ると、文法受身において、正判定問題と誤判定問題の結果が異なっていることが考えられる。文法受身において誤判定問題の正答率が低い動詞が多い。

そこで、縦軸に誤判定問題の正答率を、横軸に正判定問題の正答率をとり、散布図を作成して観察する。図1に動詞種別ごとに作成した。(動詞の前に付した2桁の数字は十の位が動詞タイプ(1:語彙受身, 2:文法受身)を表し、一の位はタイプ内の番号を表す。以下同じ)

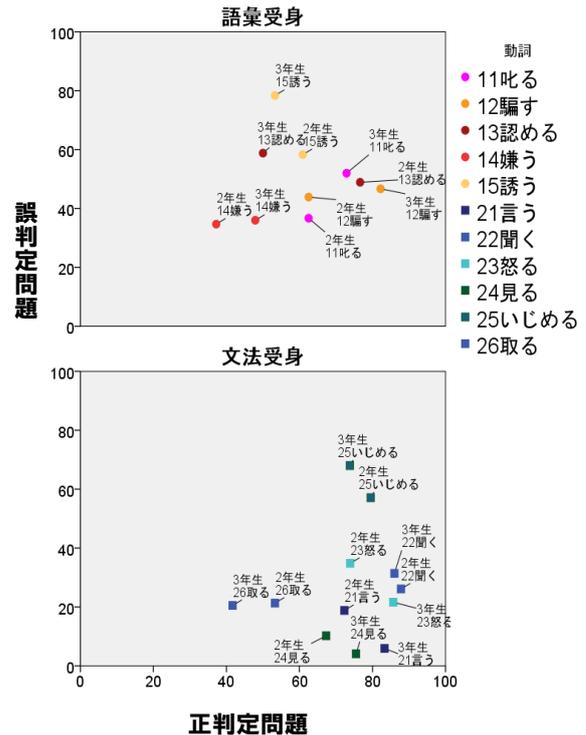


図1 「正判定」「誤判定別」正答率

この図から語彙受身は正判定問題が誤判定問題を多少上回る程度であるのに対し、文法受身のグループは右下に集中しており、正判定問題と誤判定問題の差が開いていることが分かる。

(3) 動詞の形式(受身/非受身)

各タイプの動詞は半数ずつ、受身で提示する動詞と非受身(能動態)で提示する動詞とに分かれている(表2)。これは、語彙受身において、受身形以外の形式での理解状況を確認することが主な狙いである。

以下に示した図2は動詞名とともに受身・非受身を表したものである。

語彙受身の図をみると、受身で提示された語(誘う、認める、叱る)が、非受身で提示された語(嫌う、騙す)よりも正答率が高い

位置に分布していることが分かる。一方、文法受身では受身で提示された語（言う、怒る、いじめる）と非受身で提示された語（聞く、取る）が混在しており、語彙受身との相違が窺える。

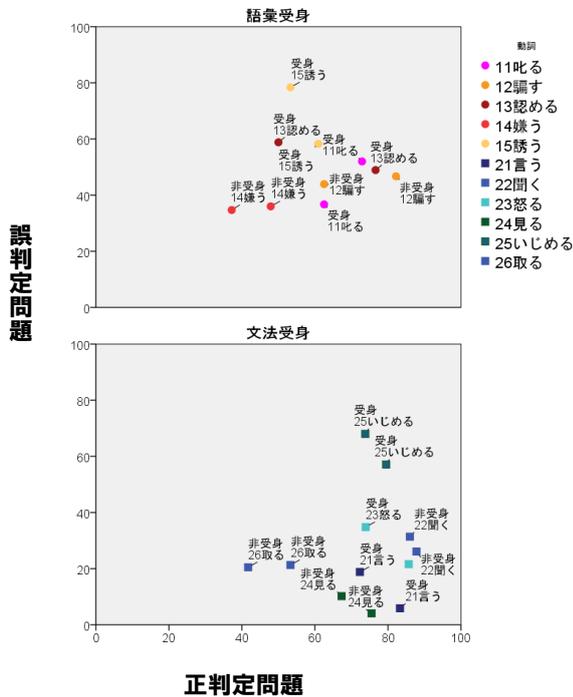


図2 受身/非受身別正答率

(4)まとめと今後の方向性

本研究では、単一の文法項目内において、動詞のタイプによって習得過程に違いのあることを明らかにするために、縦断的発話コーパスで得られた「語彙受身」「文法受身」を量的に検証する調査を実施した。

その結果、理解調査において、「語彙受身」では正判定問題と誤判定問題の正答率に差が見られないのに対し、「文法受身」では一部の語を除き、誤判定問題の正答率が低く、正判定問題も誤判定問題も同様に正しいと判断する傾向が見られた。

先に行った縦断的発話コーパスの分析で自発的な会話において、受身で多く使用された語である「言う」「聞く」においても理解調査では正解率に差がみられた。

これは、縦断的発話コーパスにおける自発的使用との相違点だといえる。同コーパスにおいて産出された受身文には、助詞が使用されないという点、また、話者である学習者自身が被動作者である場合がほとんどであるという点はあるものの、明らかな誤用と思われるものは少なかった。この「使える」と「使えない」の間にあるものは何であるのか、今後は、今回のデータと縦断的発話コーパスの

データを丁寧に検討していくことで、習得過程における受身文の発達過程を動詞のタイプという面から明らかにしていくとともに、日本語の習得過程における動詞の役割についても明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川崎 千枝見 (KAWASAKI CHIEMI)

広島国際学院大学・工学部・講師

研究者番号：70432705